

第49回

『長崎の鐘』を巡る人たち

古関、サトウ、藤山一郎

昭和24年7月、終戦から4年後の夏、藤山一郎の歌う『長崎の鐘』が発売されました。

自ら被爆した長崎医大の永井隆博士の手記『長崎の鐘』が同年1月に出版され、同書の内容をモチーフにしてサトウハチローが作詞、古関裕而がメロディーをつけたものでした。クラシック音楽も手がけていた古関ならではの格調高い旋律と、これもまた東京音楽学校（現在の東京藝大）を首席で卒業したクラシック畑出身の藤山一郎の名唱とが見事にマッチし、後世に残る名曲となりました。

作曲に際し、先に渡されたサトウの詞を見た古関は、被爆地・長崎だけでなく、戦災で難を受けたすべての人に捧げる歌にしようかと決意します。後半部「なぐさめ はげまし」から長調に転調、鐘の音が「希望の鐘」となって聞こえてくるような明るさを強調することで、人々の再起への願いを込めています。

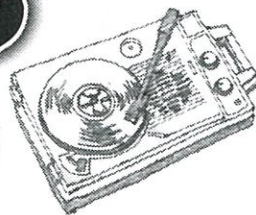
「長崎の鐘」とは、廃墟となった浦上天主堂の瓦礫から掘り出された鐘

のことで、そう、天主堂にいた信徒全員が亡くなっていることもあり、鎮魂を祈るサトウ（実弟が広島で被爆

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

堀井六郎
絵・松本浦



死、古関、藤山の気持ち伝わってきます。

印象的なエンディングの「鐘が鳴るウウー」の箇所ですが、通常は「鳴るー」を基調音「ドー」の音だけで終えるのですが、「ミレドー」として装飾音にしたのは、おそらく鐘の余韻を表現したかった古関のクラシック音楽的な発想でしょう。

米国のオールディーズ・ポップスを聴いて育った大瀧詠一、桑田佳祐なども装飾音を好んで使っています。が、カバー曲を除き、昭和歌謡でこのような使い方をしたのは古関が最初かもしれません。

『長崎の鐘』は大ヒットし、翌年、松竹で映画化されましたが、三人の共同脚本家の中に、新藤兼人、橋田寿賀子の名があります。

『長崎の鐘』のレコードが発売された昭和24年7月は、前年制定された全国高校野球選手権大会の大会歌、古関作曲の『栄冠は君に輝く』が、伊藤久男の力強い歌声でレコード化された時期と重なっています。また、同郷福島出身の伊藤とは前後して『イヨマンテの夜』を録音、翌年の大ヒットにつながっています。

戦後、上海から帰国し『東京ブギウギ』（歌・笠置シズ子）に始まるヒット曲を連発していた作曲家・服部良一の活躍を横目で見ながら、古関裕而が大きく輝いた年でもありました。

古関は『長崎の鐘』以外にも、昭和22年に『雨のオランダ坂』（歌・渡辺ま子）を、同26年に『長崎の雨』（歌・藤山一郎）を作曲、「長崎三部作」の中の『雨のオランダ坂』『長崎の雨』で、結果として、雨の少ない地域だった長崎を「雨降る街」へとイメージチェンジさせる流れを作り出すことになりました。

昭和26年1月3日から始まった「NHK紅白歌合戦」の第1回の大トりの曲、それは藤山一郎が歌う『長崎の鐘』でした。

